資料1-1

宍道湖における アオコ発生条件の解析

水環境科 佐藤紗知子

1. はじめに

5	~道湖	におけ	るアオコの発生状況
	年度	発生月	
	1985	8	1984~2014年のアオコ発生月
	1986	8	
	1988	8	▶ 8月に集中している。
	1989	8	
	1990	9	
	1997	9	er.
	1998	7	2
	2006	8	
	2010	8	
	2011	8	
	2012	8	

 「夏季に塩化物イオン濃度が低下し、日照に より水温が高くなるとアオコが発生する」
 と報告されている。



- アオコが発生する具体的な塩化物イオン濃度,
 水温,日照条件等は明確にされていない。
- ・栄養塩濃度との関係についても詳しく調べられていない。

3

2. 方法



期間:1984~2012年(※) ●アオコの発生状況の記録 ●水温 ●塩化物イオン濃度 ●栄養塩濃度(NO₃-N, PO₄-P) ●日照時間→気象庁HP ●斐伊川流量→国土交通省出雲河川事務所 ※2012年までしか斐伊川流量データがないため



統計パッケージSPSS (ver.11, IBM社)

すでに分類がわかっているものがある時に、 (1)分類の目安となる変数と関数を求める (2)新たな物を分類する



2次元の場合

5





独立変数→起点月を含む過去4ヶ月の各月のDATA

●水温
●塩化物イオン濃度
●栄養塩濃度 (NO₃-N, PO₄-P)
●日照時間
●斐伊川流量

「起点月」

アオコが発生した年はその発生した月, 発生しなかった年は8月 表1-1 標準化正準判別関数

変数	影響の強さ
起点月の1ヶ月前の水温	0.677
起点月の塩化物イオン濃度	-0.676
起点月の2ヶ月前の塩化物イオン濃度	-0.619



・起点月の1ヶ月前の水温
 ・起点月の塩化物イオン濃度
 がアオコ発生の判別に同程度寄与している

Z1=-0.000784(起点月の塩化物イオン濃度) -0.000733(起点月の2か月前の塩化物イオン濃度) +0.338(起点月の1か月前の水温)-5.91

表2-1 1984~2012年の起点月のZ1

年度	観測結果	分析1	年度	観測結果	分析1
1984	-	1.05(*)	2000	-	-1.55
1985	+	1.40	2001	-	-0.05
1986	+	2.60	2002	-	-0.87
1987	-	-0.24	2003	-	1.29(*)
1988	+	1.40	2004	-	-0.75
1989	+	1.61	2005	-	-2.18
1990	+	1.02	2006	+	1.02
1991	-	-1.19	2007	-	-2.84
1992	-	-2.18	2008	-	-1.56
1993	-	-0.23	2009	-	-0.06
1994	-	-1.23	2010	+	0.96
1995	-	-0.05	2011	+	2.10
1996	-	-0.94	2012	+	-0.08(*)
1997	+	1.74	正確	睢	89.7%
1998	+	0.67	+:発生		
1999	-	-1.78	-:未発生		
			(*): 誤判定		



- ・ 起点月の1か月前の水温の影響が大きい
- 起点月と起点月の1ヶ月前の塩化物イオン濃度の相関が高い(r=0.78)



独立変数として

起点月の塩化物イオン濃度

→起点月の1か月前の塩化物イオン濃度 を用いてアオコ発生の予測可能なのでは

3. 結果②

✿判別分析2✿

独立変数→ 起点月の1ヶ月前の水温 起点月の1ヶ月前の塩化物イオン濃度 起点月の2ヶ月前の塩化物イオン濃度

表1-2 標準化正準判別関数

変数	影響の強さ
起点月の1ヶ月前の水温	0.728
起点月の1ヶ月前の塩化物イオン濃度	-0.697
起点月の2ヶ月前の塩化物イオン濃度	-0.387

9

Z2=-0.000908(起点月の1か月前の塩化物イオン濃度) -0.000498(起点月の2か月前の塩化物イオン濃度) +0.346(起点月の1か月前の水温)-6.37

年度 年度	観測結果	分析2	年度	観測結果	分析2
1984	-	1.42(*)	2000	-	-0.74
1985	+	1.51	2001	-	0.02(*)
1986	+	2.58	2002	-	-0.65
1987	-	-0.44	2003	-	0.39(*)
1988	+	1.46	2004	-	-0.13
1989	+	1.75	2005	-	-1.78
1990	+	1.74	2006	+	0.28
1991	-	-0.85	2007	-	-3.82
1992	-	-1.42	2008	-	-0.77
1993	-	-0.09	2009	-	-1.12
1994	-	-0.81	2010	+	0.61
1995	-	-0.21	2011	+	1.86
1996	-	-0.96	2012	+	-0.48(*)
1997	+	0.95	正確	ì	86.2%
1998	+	0.66	+:発生		
1999	-	-1.46	-:未発生		
			(*): 誤判定		

表2-2 1984~2012年の起点月の22

直近のデータによる検証

表3 2013, 2014年の7, 8, 9月のZ1およびZ2

年度	月	観測結果	分析1	分析2
2013	7	-	-3.09	-3.82
	8	-	-2.30	-1.73
	9	-	-0.48	-0.85
2014	7	-	-0.64	-0.72
	8	-	-0.87	-0.62
	9	-	0.73(*)	-0.25
	正確性		83%	100%

1984~2012	分析1	分析2
正確性	26/29	25/29

起点月の塩化物イオン濃度 ↓ 起点月の1か月前の塩化物イオン濃度 を用いることができる。

11

4. まとめ

- ①1ヶ月前の水温が高く、発生月及び2ヶ月前の塩化物イオン濃度が低いとアオコが発生する傾向がある。
- ②アオコの発生を1ヶ月前の水質データを用い て高確率で判別できた。

資料1-2

宍道湖におけるD-COD及びDOCと 水温との関係

はじめに

宍道湖毎週調査結果から、D-COD及びDOCと水温が どのような関係を持つのか解析を行った。

	Unit	Maximum	Minimum	Average	Median
COD	$mg L^{-1}$	7.3	3.9	5.3	5.0
D-COD	$mg L^{-1}$	4.7	2.5	3.5	3.4
P-COD	$mg L^{-1}$	3.5	0.7	1.8	1.8
D-COD/COD		0.83	0.46	0.67	0.67
P-COD/COD		0.52	0.17	0.33	0.33
тос	$mg L^{-1}$	4.7	1.9	2.8	2.6
DOC	$mg L^{-1}$	2.7	1.3	1.9	1.8
POC	$mg L^{-1}$	2.2	0.3	0.9	0.7
DOC/TOC		0.86	0.47	0.70	0.72
POC/TOC		0.53	0.14	0.30	0.28







水温を1週ずつずらして行き, D-COD及びDOCと水温の相関 をグラフ化した。 3次式で良い相関が得られた。

極値

D-COD:6.4週(45日) DOC :8.4週(59日)







資料1-3

宍道湖における二枚貝漁業による 水質浄化機能

はじめに

ヤマトシジミのリン含有量を分析し、宍道湖のTN/TP比 の長期傾向にどのような影響を与えているのかを明ら かにする。またTN/TP比が低下傾向にあった場合に、宍 道湖の水質に対してシジミ漁獲量の減少がどのように 影響しているのかを明らかにすることを試みた。さらに 宍道湖のTN・TP濃度がどのような因子によって決まって いるのかを様々な因子を用いて重回帰分析を行って解 析した。





宍道湖

- 16 -

	Weight (g)	Conc. (mg L^{-1})	CV(%) n=5	P content (Pmg g ⁻¹)
Shell 1	2.68	1.113	4.5	0.104
shell 2	3.07	0.889	4.6	0.072
Shell 3	2.32	0.971	6.5	0.105
Shell 4	2.77	0.753	6.7	0.068
Shell 5	3.11	1.072	3.2	0.086
Average	2.79	0.960	5.1	0.087
Flesh 1	0.0345	0.380	3.6	11.05
Flesh 2	0.0352	0.370	5.0	10.54
Flesh 3	0.0424	0.416	7.7	9.82
Flesh 4	0.0396	0.404	3.2	10.23
Flesh 5	0.0373	0.374	3.9	10.02
Average	0.0378	0.389	4.7	10.33

ヤマトシジミのリン含有量

ヤマトシジミ1gのうち, 殻の重量割合が79.6%, 身の重量 割合が20.4%であった。ヤマトシジミの身の湿重1gあたり のリン含有量は,水分が86.1%なので身の乾燥重量当た りのリン含有量が10.33mg×(100-86.1)/100=1.44mgとな る。この結果より,ヤマトシジミ1gあたりのリンの含有量は 殻:0.0087%×79.6%/10=0.069mg 身:10.33mg×13.9%/100×20.4%/100=0.293mg 合計:0.362mg 1gのヤマトシジミの窒素含有量は殻(重量80.5%)が0.2%, 身(重量19.5%)が1.47%であるため,殻のTNが1.61mg, 身のTNが2.87mgで,合計4.48mgであった。 ヤマトシジミのTN/TP比は12.4と計算された。





	TN conc. of Lake Shinji	Removal of TN by catch (t)	Annual TN load of Riv. Hii	TP conc. of Lake Shinji	Removal of TP by catch (t)	Annual TP load of Riv. Hii	Chloride ion conc of Lake Shinji	Annual TN release (t)	Annual TP release (t)	Water temp. of Lake Shinji (bottom)
1985	476	55.2	1283	38.4	3.62	82.1	1797	89.2	32.3	15.8
1986	477	52.7	798	48.3	3.46	47.6	1862	307.5	45.1	16.1
1987	468	50.8	788	44.8	3.34	44.6	2200	200.0	27.0	17.1
1988	476	43.7	814	43.5	2.87	45.5	1769	142.3	32.6	16.6
1989	465	42.6	1140	32.9	2.79	70.1	1149	299.3	28.5	16.7
1990	471	40.8	905	30.8	2.68	52.1	1425	487.6	22.7	17.1
1991	472	39.9	924	32.4	2.62	53.5	1090	55.4	10.9	16.9
1992	509	37.9	653	43.4	2.48	35.1	2409	108.4	29.1	16.6
1993	449	39.1	1380	33.9	2.57	84.8	1483	106.7	4.4	15.5
1994	432	36.3	667	46.8	2.38	35.1	2891	114.6	40.4	17.4
1995	475	37.6	909	35.5	2.47	51.3	2225	58.8	12.9	15.7
1996	493	36.5	846	43.7	2.40	46.2	2194	91.5	39.1	15.9
1997	536	37.2	1485	51.3	2.44	94.2	1474	198.6	62.0	16.9
1998	458	29.6	1225	52.4	1.94	72.5	1203	1.4	36.7	17.6
1999	47B	32.7	1203	52.8	2.15	69.5	2330	51.9	59.9	17.2
2000	569	33.6	974	49.2	2.21	55.3	2815	179.9	65.4	17.1
2001	532	33.3	869	42.5	2.18	45.6	1755	371.1	40.7	16.2
2002	521	33.4	948	45.3	2.19	50.1	2315	258.2	42.3	15.9
2003	509	31.4	1313	45.0	2.06	75.0	1399	26.4	29.0	16.1
2004	520	33.2	1153	48.1	2.18	66.7	2110	134.0	36.5	16.7
2005	513	27.3	930	37.1	1.79	50.3	21 50	172.1	5.2	15.9
2006	495	28.6	1587	32.7	1.88	104.1	1529	84.8	22.5	15.9
2007	518	21.5	775	49.8	1.41	41.5	2996	193.2	39.8	16.8
2008	472	16.6	816	54.0	1.09	41.8	2718	173.8	42.7	15.7
2009	504	15.2	1128	37.1	1.00	65.6	2058	76.4	11.0	15.9
2010	510	16.7	1095	59.2	1.10	61.8	1822	46.8	52.8	16.5
2011	664	9.9	1667	71.4	0.65	107.8	1215	194.2	47.8	15.9
2013	560	8.1	702	60.3	0.53	39.6	2816	149.7	38.8	16.5

重回帰分析

従属変数を宍道湖TN濃度,独立変数をそれ以外として重回帰分析を行ったところ, 漁獲による窒素持ち出し量以外は採用されず,次式が得られた。

(宍道湖TN濃度 (µg L⁻¹)) = 571 - 2.13×(漁獲による窒素持ち出し量(t))

この回帰式の寄与率R²は0.313であり, このことからTN変動の約31%が説明できる。 妥当性の検討を行ったところ, *p*<0.01であった。また, 他の変数とは有意な相関が 見られなかった(P>0.05)。

従属変数をTP, 独立変数をそれ以外として重回帰分析を行ったところ, 次の式が 得られた。

(宍道湖TP濃度 (µg L⁻¹)) = 44.2 + 0.386 × (TP年間溶出量t) -5.71×(漁獲によるリン持ち出し量(t))

TP年間溶出量の標準偏回帰係数は0.651, 漁獲によるリン持ち出し量は-0.466で あり, TP年間溶出量のほうが上回っていたため, TP年間溶出量のほうがより寄与 している。この回帰式の寄与率R²は0.725であり, このことからTP変動の約73%が 説明できる。妥当性の検討を行ったところ, *p*< 0.001でありこの回帰式の妥当性が 有意に示された。以上のことから, TN•TP濃度は漁獲量との相関が見られること が示された。



宍道湖のTN/TP比の低下理由

- ・塩化物イオン濃度の有意な
 上昇
- ▪TP溶出量の増加



資料1-4

宍道湖における数値シミュレーション進行状況

港湾空港技術研究所 井上 徹教

1.計算概要

港湾空港技術研究所では、これまで内湾において適用してきた低次生態系数値シミュレーションモデル(通称: 伊勢湾シミュレーター)を用いて、宍道湖における流動場の計算を試みてきた。計算の概要については以下の通 り。

- ・上流側境界には、斐伊川の流量を宍道湖全体の集水面積で換算した値と水温を与える。
- ・下流側境界には、大橋川での水温と塩分の鉛直分布を与える。
- ・気象条件は、宍道湖湖心のデータを優先的に使用し、不足するデータは松江気象台のデータを使用する。
- ・計算メッシュは、水平方向 200m、鉛直方向 10 cm (図1参照)。



図1 計算格子図

2.今年度の作業内容

2012 年9月19日に宍道湖西岸において発生した青潮は、台風1216号に起因する強い西風の影響であると考えられるが、青潮が大規模化した要因として前日にみられた新たな塩水侵入が大きく影響している可能性が指摘されている(管原、私信)。今年度は、上記時期の宍道湖底層塩水塊の挙動を数値シミュレーションにより再現するとともに、新たな塩水侵入の有無により塩水塊の遡上がどの程度影響を受けるのかについて、数値実験により検討した。

まず予備計算として 2012 年 1 月 1 日 0 時から、初期条件を全格子で水温 4.4 、塩分 7.8 psu として、同 9 月 10 日 0 時までの計算を行った。これを以下の計算での初期条件として用いる。次に、再現計算として 9 月 10 日 0 時から 9 月 21 日 0 時までの計算を行った。加えて、数値実験として 9 月 17 日 17 時以降にみられた大橋川 での塩分上昇を強制的に排除した入力ファイルを用いて同様の計算を行った(図 2 参照)。

計算結果の一例として、図1の赤線で示す鉛直断面内の塩分分布の様子を図3および図4に示す。図3は再現 計算の結果、図4は塩水侵入を強制的に排除した数値実験の結果である。両図とも西風による底層塩水塊の西方 への移動が確認されるが、再現計算(図3)では水表面付近まで高塩分水塊の湧昇がみられるのに対し、数値実 験(図4)では高塩分水塊は水深2.5 m程度までの遡上にとどまっている。この差が生じた原因については、塩 水塊が西方に移動した際に、塩水塊の規模が大きいほど湖心への復元力が小さくなり、湧昇が容易になるためと 考えている。



図2 再現計算と数値実験に使用した大橋川での塩分境界条件(水深285 cm)



図4 数値実験での塩分分布

3.今後の検討

上記の初歩的な検討により、宍道湖での青潮の大規模化にはある程度の塩水塊の規模が必要になる可能性が見いだされた。今後は以下の考察を行いたい。

・2012年の再現計算に粒子追跡法を適用し、初期に存在した硫化物を含む水塊と新たに進入した塩水塊とを区別する。

・一般的な数値実験(感度解析)により、塩水塊の湧昇が水表面に達するための風応力や底層での圧力勾配、塩水塊の規模等の物理的な条件の把握、可能であれば指標化。

・室内実験により、塩水塊の進入から硫化物溶出までの時間スケール等生化学的な条件の把握。

・青潮リスクが生じる塩分の定量化。漁獲対象種の生息環境を踏まえた最適塩分の提案。

資料1-5

風による底成層の破壊と再成層化について

島根大学大学院総合理工学研究科 管原庄吾・清家泰

1. 目的

2012年9月19日 宍道湖において青潮が発生し 宍道湖生態系に大きな影響を及ぼした。 2012年8月下旬に行った硫化水素(H₂S + HS⁻)を指標とした水平分布調査の結果から,湖水 中の硫化水素の蓄積には,宍道湖特有の現象である底成層の形成が大きく関係しているこ とが明らかとなった。そこで本研究では,夏季の宍道湖湖心における底成層に着目し,底 成層の層厚,底成層中硫化水素,栄養塩及び湖底堆積物中硫化水素の追跡調査を行った。

底成層とは密度や物質分布の大きな鉛直勾配が湖底近傍にのみ偏在するような構造のこと(Fig.1 参照)。



Fig.1 宍道湖湖心の底成層(左: 2014/6/17,右: 2015/1/27)

2. 実験方法

2014 年 7 月から 10 月にかけて計 6 回行った。宍道湖湖心において,潜水作業により直径 70 mm,長さ 1500 mmのアクリルパイプを用いて湖底堆積物ごと湖水を柱状に採取した。 得られたコアの堆積物表層を基準として 5 cm 層毎に分取し,溶存酸素(ウインクラー法; Winkler, 1988; Carpenter, 1965),塩分(Mohr 法; American Public Health Association, 1936),硫化 水素(メチレンプルー法; Cline, 1969),リン酸態リン(PO₄³⁻)及び溶存無機態窒素(DIN: NH₄⁺, NO₂⁻, NO₃⁻)を定量した。湖底堆積物試料は,潜水作業により直径 50 mm,長さ 700 mmのア クリルパイプを用いて堆積物を柱状に採取した。堆積物表層を基準として 1 cm または 2 cm の層状に切り,湖底堆積物中硫化水素の分析に供した。 3. 結果(概要)

底成層の形成に伴い,貧酸素化・無酸素化が進行し湖底からリン,窒素及び硫化水素が 溶出した(Fig. 2, Fig. 3)。台風等に起因する強風が観測された後,底成層はみられず,湖 底に酸素が供給された。

2012年 2013年及び 2014年の 5月~10月の宍道湖湖心湖底直上水中 H₂S の経月変化を(Fig. 4-)に示す。底成層が特に発達した 2012 年 8 月には最大で 21.5 mgS/L の H₂S が検出された。2013 年と 2014 年の最大値はそれぞれ 1.6 mgS/L 及び 0.26 mgS/L であり, 2012 年と比較すると極僅かだった。また, 2012~2014 年の同時期における湖底堆積物中の H₂S は, 2012年には最大で約 150 mgS/L 検出したものの, 2013 年と 2014 年は 29 mgS/L 及び 15 mgS/L だった(Fig. 4-)。このことから,底成層の破壊は底層への酸素供給のみならず湖底堆積物中の嫌気化に対する抑制効果もあることが示唆された。

本研究から,底成層は台風等に起因する強風によって破壊されることが明らかになった ものの,底成層の解消及び底質改善には100%自然の力に頼っているのが現状である。2012 年9月19日に発生した青潮は,7月下旬に観測された西風により高塩水が宍道湖に流入し, 底成層が発達したことが大きな原因であり,今後の宍道湖保全のためにはその対策が必要 と考えられる。

謝辞

本研究は,河川技術研究開発制度地域課題分野(河川生態)「人との相互作用によって持続 する汽水湖生態系の構築」(研究代表者:山室真澄)による研究成果の一部である。



 Fig. 2
 2014 年 7~8 月の平均風速,風向及び宍道湖湖心における湖底直上水中硫化水素,塩

 分(Salinity), DO, NH4⁺, NO2⁻, NO3⁻の鉛直分布



Fig. 3 2014年9月~10月の平均風速 風向及び宍道湖湖心における湖底直上水中硫化水素, 塩分(Salinity), DO, NH₄⁺, NO₂⁻, NO₃⁻の鉛直分布



Fig. 4 2012 年,2013 年及び 2014 年の 5 月~10 月の宍道湖湖心直上水中硫化水素濃度() 及び堆積物中溶存硫化水素の比較()